

# 大学生の友人関係における自己開示の深さと 自己開示抑制の理由の関連 —親しさの違いと性差に着目して—

森田 美雪・井上 直子

キーワード：自己開示の深さ 自己開示抑制の理由 大学生

**抄録：**本研究は、大学生の友人関係における自己開示の深さと自己開示抑制の理由の関連を、知り合ったばかりの同性の友人と親しい同性の友人という親しさの違いに着目し、性差も含めて検討することを目的とした。分析対象は、都内私立大学の学生 253 名であり、質問紙による調査を行った。調査用紙は、自己開示の深さ尺度（丹羽・丸野，2010）と自己開示抑制態度尺度（兪・松井，2012）を用い、教示において知り合ったばかりの同性の友人を想定するものと、親しい同性の友人を想定するものの2種類を作成して、ランダムにいずれかを配布した。自己開示の量と深さ、自己開示抑制の傾向と理由の違いについて *t* 検定を行った後、親しさ別に自己開示の量と深さ、および自己開示抑制の傾向と理由についての相関分析を、性差を考慮した上で行った。その結果、男女の親しさの違いによる自己開示には様々な特徴が見られた。男性では、知り合ったばかりの同性の友人に対しては、お互いのことをより知るため、また関係を深めるために気晴らしを含んだ自己開示をしているという特徴が、親しい同性の友人に対しては、話しても仕方がないとのあきらめているために自己開示を抑制する人ほど全ての深さにおいて自己開示をしないという特徴のみが顕著であり、深さによる違いは見られなかった。一方、女性では、多くの自己開示抑制の理由と様々な深さにおける自己開示の量の間に関連が見られ、より複雑な自己開示の特徴を示したが、特に、知り合ったばかりの同性の友人に対しては、気晴らしを優先するために自己開示を抑制する人ほど殆ど全ての深さにおいてより多く自己開示を行い、親しい同性の友人に対しては弱みを隠したいために自己開示を抑制する人ほど全ての深さにおいて自己開示をしないという特徴が顕著であった。

## 1. 問題

自己開示 (Self-disclosure) とは相手に自分のことを伝える行為である。それは、単に名前や所属を教えるなどといった情報提供だけでなく、榎本 (1997) が定義したように“自分の性格や身体的特徴、考えていること、感じていること、経験や境遇など自己の性質や状態を表す事柄を他者に話すこと”である。

青年期である大学生にとって友人は特に重要な存在であり (岡田, 2006)、重要な相手だけか

らこそ自己開示したい、しよう、しなければと心が動き、その体験の中で自己形成が促される一方で、重要な相手だからこそ、かえって自分のなかで湧き上がっている感情や思いを相手に伝えることができない人もいると考えられる。

こうした青年期における自己開示を抑制する要因に関して、片山（1996）は否定的内容の自己開示への抵抗感について調査し、他者との関係に影響を与える対他的要因と、他者との関係には影響せず自分自身のみに影響する対自的要因の二つを取り出した。また、榎本（1997）はより感情的な反応に着目し、「現在の関係を崩すことへの不安」、「深い相互理解に対する否定的感情」、「相手の反応に対する不安」といった3側面の存在を明らかにした。また、現代の青年期の特徴として人間関係の希薄化が指摘され（廣實，2002；岡田，2011），互いに傷つけあうことを避け、表面的な関わりに終始する傾向（岡田，2009）が指摘されている。

その一方で、近年では他者との良好な関係を構築するためには、自分で自分についての情報を相手にはっきりと伝えることが求められるようになってきた（丹羽・丸野，2010）。青年期の人間関係の希薄化や表面的なかかわりの問題を自己開示という観点で研究する意識が高まるなか、丹羽・丸野（2010）は、自己開示の深さを考慮した尺度を作成した。そのうえで、自己開示の深さが相手との関係性に応じてどのように異なるかについて、①社会的浸透理論（Altman & Taylor, 1973）と、②対人相互交渉モデル（丸野，1987）のそれぞれに基づく可能性を以下のように整理した。①によれば、関係構築の初期段階では、相手からの評価を懸念して表層的な自己開示を行い、深層的な自己開示はほとんど行わない。親密になるにつれて、相手に自分のことをもっと知ってもらいたいと思うようになり深層的な自己開示を行い、表層的な自己開示はそれほど行わない。一方、②によれば、①と同様の可能性も認めたとうえで、親密になるにつれて、自己開示における関係性の影響も生じる。親密になるにつれて、相手の心を傷つけたり、相手に負担をかけたりしたくないという配慮から、深層的な自己開示ではなく、表層的な自己開示に留めることもある。丹羽・丸野（2010）の調査では、②の可能性を支持する結果となり、自己開示研究において相手との関係性と自己開示の深さを考慮する意義が示されたが、どのような自己開示の抑制が関与しているか、性差はあるか、といった検討はなされていない。

## 2. 目的

本研究は、大学生の友人関係における自己開示の深さと自己開示抑制の理由の関連を、知り合ったばかりの同性の友人と親しい同性の友人という親しさの違いに着目し、性差も含めて検討することを目的とする。なお、先行研究とは異なった組み合わせの質問紙や対象を用いること、先行研究においても一貫した結果が得られていないことなどから、仮説検証的ではなく探索的に検討することとした。

### 3. 方法

#### 1) 調査対象

都内にある私立 A 大学の大学生男女 363 名を対象とし、質問紙による調査を行った。

#### 2) 調査方法

調査は 2013 年 10 月～11 月に行われた。調査実施の同意が得られた教員のクラスの受講生に対し、授業時間終了後に文書と口頭にて調査の目的と方法および倫理的配慮を説明したうえで、無記名の調査用紙を配布し、次回の授業終了時に回収した。その際に、親しさの違いに対応する 2 種類の教示文を用意したため、調査用紙は 2 種類（知り合ったばかりの同性の友人を想定する教示の調査用紙と、親しい同性の友人を想定する教示の調査用紙）を同数用意し、調査対象者にはランダムにいずれかを配布した。なお、本研究は桜美林大学倫理審査委員会の許可を受けたうえで実施した（受付番号 13014）。

#### 3) 調査用紙

##### (1) フェイスシート

年齢、性別について記入を求めた。これらの質問項目は、年齢は対象者が青年期に該当するのを確認するために、性別は性差の検討のために設けた。

##### (2) 自己開示の深さ（丹羽・丸野, 2010）

「自己開示の深さ」の尺度は、24 項目からなり、7 件法で回答を求め、自己開示の量（合計得点）と深さ（レベル得点）を測定する。自己開示するかしないか、どれくらいするか、という量だけでなく、自己開示の内容をレベルⅠ（趣味）、レベルⅡ（困難な経験）、レベルⅢ（決定的ではない欠点や弱点）、レベルⅣ（否定的な性格や能力）と階層的に扱い、深さという視点からも捉えようと試みていることから採用した。なお、教示文は 2 種類用意し、一方は「同性の知り合ったばかりの友人」を、もう一方は「同性の親しい友人」を具体的に思い浮かべてもらい、その友人を表すイニシャルの記入をしたうえで、その友人に対してどのくらい詳しく自分について話すかについて回答を求めた。

##### (3) 自己開示抑制態度（兪・松井, 2012）

「自己開示抑制態度」の尺度は、30 項目からなり、5 件法で回答を求め、自己開示抑制の傾向（合計得点）と理由（下位尺度得点）を測定する。ストレスのかかった経験内容に関して、どのような理由から被開示者に対する自己開示を抑制するかを検討する研究において用いられたものである。これらの質問項目の内容を吟味すると、ストレスのかかった経験内容以外の自己開示にも応用可能な質問となっており、自己開示抑制の理由（弱みの隠蔽、自己解消、相手への配慮、あきらめ、気晴らし希求）がきめ細かに探索できる点に特徴があることから採用した。回答に際しては、自己開示をする相手は②の質問項目で想起してもらった友人とした。

##### (4) 分析方法

分析には SPSS Ver.20 を使用した。親しさの違いによる自己開示の量と深さ、自己開示抑

制の傾向と理由の違いについてまず  $t$  検定を行った。その後、親しさ別に自己開示の量と深さ、および自己開示抑制の傾向と理由についての相関分析を、性差を考慮した上で行った。

## 4. 結果

### 1) 親しさの違いに関する分析

#### (1) 分析対象の基礎データ

本研究の分析対象者は253名(男性90名,女性163名),年齢は18~22歳(平均年齢20.09歳,  $SD=1.01$ , 回収率14.3%, 有効回答率69%)となった。親しさ別の分析対象者は、知り合ったばかりの同性の友人に対する自己開示について回答した群(以下:知り合ったばかりの群)が125名(男性38名,女性87名),親しい同性の友人に対する自己開示について回答した群(以下:親しい群)が128名(男性52名,女性76名)であった。

#### (2) 親しさの違いによる自己開示の量と深さ, 自己開示抑制の傾向と理由の差の検討

まず、自己開示の深さ尺度の合計得点を自己開示量得点として親しさ別に算出し、平均値の  $t$  検定を行った結果、親しい群のほうが有意に高い得点を示した ( $t(251) = -11.86, p < .001$ )。次に、自己開示の深さ尺度の各レベル(レベルI~IV)得点を親しさ別に算出し、平均値の  $t$  検定を行った結果、レベルI ( $t(226) = -7.88, p < .001$ ), レベルII ( $t(251) = -10.07, p < .001$ ), レベルIII ( $t(251) = -10.93, p < .001$ ), レベルIV ( $t(251) = -11.54, p < .001$ ) のすべてのレベルにおいて親しい群のほうが有意に高い得点を示した。

同様に、自己開示抑制態度尺度の合計得点を自己開示抑制傾向得点として親しさ別に算出し、平均値の  $t$  検定を行った結果、知り合ったばかりの群のほうが有意に高い得点を示した ( $t(251) = 4.19, p < .001$ )。次に、自己開示抑制態度尺度の各下位尺度(弱みの隠蔽, 自己解消, 相手への配慮, あきらめ, 気晴らし希求)得点を親しさ別に算出し、平均値の  $t$  検定を行った結果、「弱みの隠蔽」( $t(251) = 3.92, p < .001$ ), 「自己解消」( $t(251) = 3.87, p < .001$ ), 「相手への配慮」( $t(251) = 3.46, p < .001$ ), 「あきらめ」( $t(251) = 6.37, p < .001$ ) の4つにおいて、知り合ったばかりの群の方が有意に高い得点を示した。また、「気晴らし希求」においては逆に、親しい群の方が有意に高い得点を示した ( $t(251) = -4.53, p < .001$ )。

なお、親しさの違いによる差が認められたため、これより先は、知り合ったばかりの群、親しい群に分けて、分析を進めていくこととした。

### 2) 知り合ったばかりの群における分析

#### (1) 性差の検討

自己開示の量と深さについて性差を検討した結果、合計得点(自己開示量)、各レベル得点のいずれにおいても有意な差は認められなかった。同様に自己開示抑制の傾向と理由について性差を検討した結果、「気晴らし希求」において女性のほうが有意に高い得点を示した ( $t(62) = -2.241, p < .05$ )。合計得点(自己開示抑制傾向)、その他の各下位尺度得点においては有意な

差は認められなかった。

## (2) 男女別の自己開示の深さと自己開示抑制の理由の関連

自己開示の深さと自己開示抑制の理由の関連について目的に沿って性差を考慮して検討するために、男女別に Pearson の相関係数を算出し、相関分析を行った。男性では、自己開示の深さのすべてのレベルと自己開示抑制の理由の「気晴らし希求」との間に有意な正の相関が認められた(表1)。女性では、自己開示の深さのレベル I と自己開示抑制の理由の「自己解消」と「あきらめ」との間に有意な負の相関、「気晴らし希求」との間に有意な正の相関が、レベル II と「弱みの隠蔽」「自己解消」「あきらめ」との間に有意な負の相関が、レベル III, IV と「気晴らし希求」との間に有意な正の相関が認められた(表2)。

表 1. 知り合ったばかりの群 (男性) の自己開示の深さ尺度の各レベルと自己開示抑制態度尺度の各下位尺度の相関分析の結果 (N=38)

	弱みの隠蔽	自己解消	相手への配慮	あきらめ	気晴らし希求
I (趣味)	-.059	-.105	-.097	-.096	.747**
II (困難な経験)	-.14	-.107	-.261	-.061	.516**
III (決定的ではない欠点や弱点)	-.223	.017	-.264	.137	.332*
IV (否定的な性格や能力)	-.179	-.138	-.272	.047	.426**

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

表 2. 知り合ったばかりの群 (女性) の自己開示の深さ尺度の各レベルと自己開示抑制態度尺度の各下位尺度の相関分析の結果 (N=87)

	弱みの隠蔽	自己解消	相手への配慮	あきらめ	気晴らし希求
I (趣味)	-.148	-.293**	-.04	-.283**	.433**
II (困難な経験)	-.250*	-.240*	-.165	-.291**	.209
III (決定的ではない欠点や弱点)	-.14	-.158	-.029	-.165	.228*
IV (否定的な性格や能力)	-.117	-.132	-.05	-.169	.256*

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

## 3) 親しい群における分析結果

### (1) 性差の検討

自己開示の量と深さについて性差を検討した結果、合計得点(自己開示量)において女性のほうが有意に高い得点を示した( $t(126) = 3.48, p < .05$ )。各レベル別得点については、レベル II ( $t(126) = 3.05, p < .05$ )、レベル III ( $t(126) = 3.46, p < .05$ )、レベル IV ( $t(126) = 3.54, p < .05$ )において、女性のほうが有意に高い得点を示した。次に、自己開示抑制の傾向と理由について性差を検討した結果、合計得点(自己開示抑制傾向)に有意な差は認められなかった( $t(126) = 1.421, n.s.$ )。各下位尺度得点については、「自己解消」( $t(126) = 4.05, p < .05$ )、「あきらめ」( $t(126) = 2.92, p < .05$ )においては男性のほうが、「気晴らし希求」( $t(80) = 2.1, p < .05$ )においては女性のほうが有意に高い得点を示した。

(2) 自己開示の深さと自己開示抑制の理由の関連

自己開示の深さと自己開示抑制の理由の関連について目的に沿って性差を考慮して検討するために、男女別に Pearson の相関係数を算出し、相関分析を行った。男性では、自己開示の深さのレベル I, II, IV と自己開示抑制の理由の「あきらめ」との間に有意な負の相関が、レベル III と「相手への配慮」「あきらめ」との間に負の相関が認められた (表 3)。女性では、自己開示の深さのレベル I と自己開示抑制の理由の「弱みの隠蔽」「自己解消」「あきらめ」との間に有意な負の相関、「気晴らし希求」との間に有意な正の相関が、レベル II, III と「弱みの隠蔽」「自己解消」「あきらめ」との間に有意な負の相関が、レベル IV と「弱みの隠蔽」との間に有意な負の相関が認められた (表 4)。

表 3. 親しい群 (男性) の自己開示の深さ尺度の各レベルと自己開示抑制態度尺度の各下位尺度の相関分析の結果 (N=52)

	弱みの隠蔽	自己解消	相手への配慮	あきらめ	気晴らし希求
I (趣味)	.073	-.039	.118	-.413**	.248
II (困難な経験)	-.134	-.176	-.209	-.444**	.071
III (決定的ではない欠点や弱点)	-.209	-.257	-.279*	-.430**	.131
IV (否定的な性格や能力)	-.232	-.207	-.167	-.532**	.083

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

表 4. 親しい群 (女性) の自己開示の深さ尺度の各レベルと自己開示抑制態度尺度の各下位尺度の相関分析の結果 (N=76)

	弱みの隠蔽	自己解消	相手への配慮	あきらめ	気晴らし希求
I (趣味)	-.262*	-.289*	-.121	-.449**	.279*
II (困難な経験)	-.293*	-.355**	-.186	-.304**	-.162
III (決定的ではない欠点や弱点)	-.265*	-.284*	-.179	-.276*	-.076
IV (否定的な性格や能力)	-.232*	-.221	-.144	-.195	-.142

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

## 5. 考察

### 1) 親しさの違いによる自己開示の量と深さ、および自己開示抑制の傾向と理由の差

結果 1) より、大学生の友人関係においては、親しさの違いによって自己開示の特徴に違いがみられ、知り合ったばかりの同性の友人に対してのほうが弱みを隠したいため、自分で解消するため、相手への配慮が働くため、そして話しても仕方がないとあきらめているために自己開示を抑制することが示された。一方、親しい同性の友人に対しては全体の量においても全ての深さにおいてもより多く自己開示を行うこと、そして自己開示を抑制しない傾向にあることが示された。また、大学生は親しい同性の友人に対してのほうが気晴らしを優先するために自己開示を抑制することも示された。

本結果は、自己開示の量や深さ、あるいは自己開示抑制の傾向について、大学生は男女とも

にもっとも親しい同性の友人に対して自己開示しているという榎本（1987）の結果、大学生は心理的に距離の近い者に対してより自己開示しやすいという榎本（1997）の考察、相手が親密性の低い人物であると自己開示は抑制されるという片山（1996）の知見、そして深層的な自己の開示は初対面の人よりも親しい友人に対して多く行われるという丹羽・丸野（2010）による社会的浸透理論（Altman & Taylor, 1973）にもとづく予測を支持する結果となった。一方、自己開示抑制の理由については、愈・松井（2012）の、消防職員を対象とした自己開示研究を行い、同僚や家族といった親密な関係にあたる人物に対しては、相手への配慮やあきらめから、同僚や家族に対してストレス経験について開示しないという報告や、被開示者との関係が親密なものであれば、自分の評価を心配する自己弁護的な視点のほかに、相手を傷つけないとの配慮から表層的な自己開示に留めることもあるという丸野（1987）の対人相互交渉モデルから、本研究においても、親しい同性の友人に対して、自分の弱い部分をさらけ出すことで自分が相手からどのようにみられているのか気にする視点と、自分の言ったことが相手を傷つけることにならないかという不安や心配の気持ちがあるために、自己開示が抑制されると推察していた。しかし、本研究においては知り合ったばかりの同性の友人に対する自己開示抑制が親しい同性の友人よりもされているという結果となった。

愈・松井（2012）の研究が、本研究のような大学生が友人に自己開示する場合と異なり、職務上の命に関わるようなストレス経験を自己開示内容に含んでいること、友人関係ではなく仕事や生活を共にする同僚や家族を自己開示対象としていることから、本研究開始時に考慮し切れていなかった、自己開示の深さのレベルもさらに心的負担となるようなストレス経験や心的外傷経験などを想定する必要があること、付き合いや心的距離を選べる友人関係と、職場関係や家族関係とは区別して考える必要があること、などが示唆されたといえよう。

## 2) 性差による自己開示の量と深さ、自己開示抑制の傾向と理由の差

結果2) より、自己開示の量と深さについては、知り合ったばかりの同性の友人に対しては性差が見られなかったが、親しい同性の友人に対しては性差が見られ、女性のほうが全体的にもまたレベル I 以外の全ての深さにおいてもより多く自己開示を行うことが示された。榎本（1997）がまとめたように、先行研究においても、特に個人的な情報（Mulcahy, 1973）や、深い内容（Morgan, 1976）については女性のほうが自己開示をすることが示されており、その理由の一つとして、一般的に女性のほうが親密な会話を好む傾向がある（Reis, Senchak & Solomon, 1985）と考察されている。本研究においても、親しい同性の友人に対する自己開示では、こうした先行研究の結果や考察を支持する結果となったが、知り合ったばかりの同性の友人に対する自己開示では、これから相手に自分のことを知ってもらう段階であり、個人的な情報や深い内容を含んだ親密な会話を求める以前の関係にあるため、性差が見られなかったと考える。

自己開示抑制の傾向については、いずれの同性の友人に対しても性差は見られなかったが、自己開示抑制の理由については、いずれの同性の友人に対しても女性のほうが気晴らしを優先

するために自己開示を抑制する傾向があること、また親しい同性の友人に対してのみ男性のほうが自分で解消するため、また話しても仕方がないとのあきらめているために自己開示を抑制する傾向があることが示された。このように、自己開示を抑制する理由が男性と女性で異なる理由については、性役割が関係していると考えられる。榎本（1997）は、育ちの中で男性は強くあらねばならず、弱音を吐くことを禁じられ、他者と競争的であることを奨励されるのに対して、女性は繊細さを要求され、他者と協調的に対することを奨励され、時に弱い面を見せるのもかわいらしさとしてプラスに評価される、といった性役割観が、女性の身近なものに対する自己開示への抵抗をゆるめ、男性のそれを強めている、と論じている。本研究において、男性のほうが女性よりも、たとえ相手が親しい同性の友人であったとしても、頼らずに頑張れる、ストレスや悩んでいることは自分で解決できる、話す必要はないという自己解消の気持ちや、自分の悩んでいることやつらい体験はたとえ話したとしても何も変わらない、分かってもらえないというあきらめの気持ちがあり、それが自己開示を抑制する大きな理由となっていることが明らかとなった。性差については、自己開示の研究に限らず多くの心理学研究で扱われるものであるが、こうした「男らしさ」、「女らしさ」という伝統的な性役割観が、自己開示及び自己開示の抑制における性差に大きな影響を与えている可能性が示唆されたと言えよう。

### 3) 性差を踏まえた親しさの違いによる自己開示の特徴

結果3) より、知り合ったばかりの群において、男女で共通している特徴は、女性のレベルⅡを除くすべてのレベルと気晴らし希求の間で正の相関が見られたことである。知り合ったばかりであるということは、相手との関係が浅く互いのことを深く知りえていない段階である。そして、知り合ったばかりの同性の友人に対する自己開示量はすでに親しい友人に対する自己開示量より少ないことが考えられる。つまり、知り合ったばかりの同性の友人に対しては、お互いのことをより知るため、また関係を深めるために気晴らしを含んだ自己開示をしていると考えられる。

一方、親しい群においては、すでにお互いのことをよく知っている段階であるため、特に気晴らしをしたいから自己開示を行うのではなく、日常的に気晴らしを含む自己開示を行っていることが考えられる。親しい群については、男女に共通した自己開示抑制の理由があるというよりは、むしろ男女での違いが際立つようになると考えられる。

また、男女ともにいずれの同性の友人に対しても、相手への配慮が働くために自己開示を抑制することと、男性のレベルⅢを除く男女の全ての深さにおける自己開示の量の間には関連がないことが示された。対人相互交渉モデル（丸野，1987）に基づく、親密になるにつれて自己開示における関係性の影響が生じ、相手への配慮から深層的ではなく表層的な自己開示に留めるといった仮説を支持した丹羽・丸野（2010）の結果とは異なり、知り合ったばかりであっても親しくとも、相手への配慮とどのような自己開示をどれくらいするかに関係が見られなかった本結果が、現代青年の特徴として人間関係の希薄化（廣實，2002；岡田，2011）に関連した現象であるかは今後の課題として検討の余地があると考えられる。



男女の様々な特徴の違いも見られた。男性は、親しさの違いによってその理由は異なるものの、ほぼ単一の自己開示抑制の理由と全ての深さにおける自己開示の量の間に関連が見られたのみで、深さによる違いは見られなかった。すなわち、知り合ったばかりの同性の友人に対しては、お互いのことをより知るため、また関係を深めるために気晴らしを含んだ自己開示をしているという特徴が、親しい同性の友人に対しては、話しても仕方がないとあきらめているために自己開示を抑制する人ほど全ての深さにおいて自己開示をしないという特徴のみが顕著であり、いずれの同性の友人に対しても、親しい群における相手への配慮とレベルⅢを除き、それ以外の自己開示抑制の理由と自己開示の深さには関連が見られなかった。三上・山口(2008)が報告した、青年期の学生における最も親しい友人に対するこれまで築いてきた友人関係が左右される不安がもたらす感情的な動機を背景とし、榎本(1997)が取り上げた、男性における傷つきやすくなる、弱みを見せることになる、不快になる、拒否される恐れがあるなどといった否定的な結果の予測(Petronio & Martin, 1986)が働いた結果、男性は親しい同性の友人に対して、自分の悩んでいることやつらい体験はたとえ話したとしても何も変わらない、分かってもらえないというあきらめの気持ちから自己開示を抑制すると考えられる。

一方、女性は、親しさの違いによって異なるものの、多くの自己開示抑制の理由と様々な深さにおける自己開示の量の間に関連が見られ、より複雑な自己開示の特徴を示した。すなわち、知り合ったばかりの同性の友人に対しては、気晴らしを優先するために自己開示を抑制する人ほどレベルⅡを除く全ての深さにおいてより多く自己開示を行うが、親しい同性の友人に対してはそういった関連はレベルⅠ以外には見られなかった。逆に、親しい同性の友人に対しては弱みを隠したいために自己開示を抑制する人ほど全ての深さにおいて自己開示をしないが、知り合ったばかりの同性の友人に対してはそういった関連はレベルⅡ以外には見られなかった。また、自分で解消するため、また話しても仕方がないとあきらめているために自己開示を抑制する人ほど自己開示をしない、という関連が、知り合ったばかりの同性の友人に対してはレベルⅠとⅡにおいて、親しい同性の友人に対してはレベルⅠ～Ⅲにおいて見られ、深さの違いはあるものの比較的似通った関連が見られた。このうち「弱みの隠蔽」については、女性の親しい同性の友人に対する自己開示を抑制する理由の一つの特徴であると考えられる。男性においては、この「弱みの隠蔽」と自己開示の量の間に関連がまったく見られなかったが、そもそも弱みの隠蔽とは、まさに弱みがあるということを認めているからこそその理由であることを考えると、男性は親しさの違いに関わらず、弱みがあるということを認めることそのものに抵抗感がある可能性を考える必要があるかもしれない。

## 5. 結論と今後の課題

大学生の友人関係における自己開示の深さと自己開示抑制の理由の関連について、本研究では、男性と女性とでは自己開示を抑制する理由が明確に異なり、親しさの違いも含めて自己開示の深さ別に検討することで、その特徴がさらに明らかとなることが示された。先行研究の結果を踏まえつつ、自己開示研究において親しさの違いと性差を複合的に考えていく必要性があ

ること、性差については榎本（1997）の論じた性役割観の視点も取り入れ、自己開示量の単純な比較ではなく、自己開示の深さや関係の親密さといった質を含めて総合的に考える必要があると言えよう。

## 引用文献

- 安藤清志（1986）．対人関係における自己開示の機能 東京女子大学紀要論集 36（2）, 167-199.
- 榎本博明（1987）．青年期（大学生）における自己開示性とその性差について 心理学研究, 58（2）, 91-97.
- 榎本博明（1997）．自己開示の心理学的研究 北大路書房
- 廣實優子（2002）．現代青年の交友関係に関連する心理学的要因の展望 広島大学大学院教育学研究科紀要, 51, 257-264.
- 片山美由紀（1996）．否定的な内容の自己開示への抵抗感と自尊心の関連 心理学研究 67（5）, 351-358.
- 三上聡美・山口裕幸（2008）．親密度の異なる友人に対する自己開示抵抗感に関する検討 九州大学心理学研究, 9, 75-81.
- 丹羽空・丸野俊一（2010）．自己開示の深さを測定する尺度の開発 パーソナリティ研究, 18（3）, 196-209.
- 岡田涼（2006）．青年期における友人関係への動機づけの発達的变化—横断的データによる検討—名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学 53, 133-140.
- 丹野宏明・下斗米淳・松井豊（2005）．親密化過程における自己開示機能の探索的検討 —自己開示に対する願望・義務感の分析から— 対人社会心理学研究, 5, 67-75.
- 兪善英・松井豊（2012）．配偶者に対する消防職員のストレス開示抑制態度が精神的健康へ及ぼす影響について 心理学研究, 83（5）, 440-449.